

《書評》

野田宣雄 『教養市民層からナチズムへ』

——比較宗教社会史のこころみ——

上 山 安 敏

意表をつく題名である。本書は現在アクティビティをもっている、「何故ナチズムは成立したのか」というテーマを追っている。しかし、ナチズムの解明は、政治史、社会経済史的アプローチが大半であり、また西欧諸国に比べて後進国型の「特殊な途」を歩んだドイツの社会的体質の解明に主力がおかれている。これに対して、筆者は副題に「比較宗教史のこころみ」とあるように、宗教とそのかわりでの知識人層とナチズムの成立との因果関係を設定した。そのことに本書の重要な意義がある。

著者は、宗教と知識人の視角から、何故カントとゲーテを生んだドイツ教養市民層の中からナチズムという鬼子を生んだのかを、エリートとしての教養市民層の大衆からの分離、教養市民層の危機のあらわれとしての民族主義的運動、ヒトラーのフェルキッシュ運動、カトリック、プロテスタントに対するヒトラーの宗教戦略などを軸にして広汎なペノラマを読者に提示してくれている。

先づ、本書を通じて著者が何を述べようとしているか、を概観しておく。構成は次のようになっている。第一章「ナチズムへの宗教社会学的アプローチ——マックス・ヴェーバーの英独比較論——」、第二章「ヒトラーの教養市民層批判——フェルキッシュ運動とナチ運動——」、第三章「ヒトラーの宗教戦略」、第四章「カトリック教徒とナチズム——エリートの問題を中心に——」、第五章「教養市民層の宗教社会史的位置——イギリスとの比較による俯瞰図——」、第六章「『ヒトラーの社会革命』論の検討」、第七章「ナチ党の地方指導者」、付論「近代知識層と救済宗教——ナチズムの問題を中心に——」である。紹介にあたって全体を網羅的

に、かつ順序通りに説明しない。むしろ内容をダイジェストして、本書の意図を浮彫にする積りである。

ナチズムが政権を獲得したとき、選挙結果を統計的に見ると、ナチズムが滲透したのがプロテスタント系の人びとであり、カトリック系の住民に支持が低かった。つまり政党として中央党を擁し、全国的に組織化されたカトリック教徒とヨーロッパでもっとも強力な労働組合運動を基盤とした社会民主党系の人びとは、ナチスの宣伝にはそれほど共鳴しなかったのである。

そこで宗教的に見て、カトリックの勢力がナチスに抵抗力をもち、プロテスタント系の人々がナチスに対して抵抗力が弱かった。少くともプロテスタントとカトリックという宗派別に見た場合、議会選挙におけるナチ党投票者数は、プロテスタントと高い相関関係をもち、逆にカトリック教徒とは低い相関関係しかもたなかった。著者はこの点に分析の拠点を置いた。カトリックはプロテスタントにくらべはるかに大きな影響を教会や聖職者から受け、サブカルチャーの次元で民衆と教会が密着していた。しかも中央党は、政治運動としてポピュリズム運動に見るように、新しい運動の担い手たちの社会政治的要求に応えようとしていたし、カトリック系の労働運動は、社会民主党の発展に刺激され、「キリスト教的社会改良」の旗印で大衆運動にも——その中に反近代主義、反知性主義的傾向がひそんでいることは事実だが——対応し、「帝政期のカトリック世界は多くの点で外の世界とくらべて後進的であるとみなされながら、かえってそこで民衆の政治的結集や政策決定過程への関与がいちはやく進んでいた」(一五三頁)

こうしたポピュリズム運動や労働者運動の台頭に中央党の民主的大衆政党への転換を可能にしたのは、カリトック世界の中でのエリートとプロテスタントの交換が行なわれたことにあると見る。著者は、「ナチスの社会改革」論に前から関心を持ち続け、第六章でも取り上げているように、エリートとプロテスタントの交換という視点が本書の至るところで見られる。カトリック世界では、その指導者は、一九一八年から一九年のワイマール革命を破局としてでなく、カトリック、ルネサンスの新たな始まりと受けとめ、ワイマール期の様々な政治的不利な状況の中で、ナチスに対してプロテスタントに比べ免疫性を持ち得たのである。ナチス運動が十九世紀以来のドイツの伝統的エリートに対する批判や攻撃をかかえて登場したときも、それはプロテスタント世界では衝撃を呼び起しえても、カトリック世界のエリートにはそれほど痛痒を感じなかったということになる。

それに農民的世界に深く根をおろしたエリート補給機構をもつカトリックでは、聖職者の働きが教育、宗教活動を通じてナチ党の党員の浸透を防いだことがあげられる。一九三三年の中央党とナチスの連立交渉、ヴァイカンとヒトラー政権との政教協約の締結という上層部の戦略にもかかわらず、日常生活の次元で教会はカトリック教徒のナチズムの侵蝕から守るための強い支持をもっていた。

これに対して、プロテスタントの方はどうであつたか。一口にいえば、ナチズムのプロテスタント村落への浸透にいわば先導的役割を果たしたのはプロテスタント系の牧師であつた。ところが第三帝国の開始とともに急速に彼ら自身の村落における地位をナチズムに脅かされ、ナチズムの幻想から醒めてそれとの闘争に追いやられてゆくことになる。ナチスによって推進される教会と教育の分離によって宗教学校の廃止や宗教の授業の縮小、ナチスによる礼拝の妨害が明らかになって始めて、教会は地位の防衛に懸命になった。けれども青年層を中心に人びとの教会離れの傾向は進み、次第にナチスの進出を前にして孤立化していく。

ここで著者は、プロテスタントの地域で何故ナチスに対する免疫性がなく、容易に進出を許したのかを独自の仮説を立てて展開している。そこに著者の設定したキータムは「教養市民層」である。「教養市民層」とはベルリン大学などを頂点とする学校制度を通じて学問と文化によって人格を陶冶することによって市民社会のエリートになった人びとである。ギムナジウム、大学を経て官僚、教師、聖職者を独占する。近代のドイツでは、「教養市民層」は資格化され、市民社会のみならず軍隊でも有資格者でなければ将校になることができなかった。著者は、この「教養市民層」こそプロテスタントルプロイセンを中核としたドイツに特有の社会現象と見る。ゲーテとカントを生んだドイツが何故ヒトラーを生んだのか。この謎をとく鍵を、著者は「ゲーテとカント」の教養主義的、人文主義的理想主義文化の伝統と野蛮なナチスとはその対極性のゆえに互いにふかく照応しあっている」と見ている。そこで十九世紀初頭以来、支配エリートの中核を構成するようになった「教養市民層」のはらんだ問題こそが、宗教の本来的なものである救済を風化させ、宗教に代って似擬宗教、代替宗教をはびこませることになる。教養と宗教信仰の結合が本質的に専門的神学に後退し、信仰と救済財をもつ特有の宗教性が薄れていった。教養市民層と結びつく、救済宗教の担い手としてのプロテスタント系の聖職者たちは、理性に基づく世界の徹底した合理主義的解釈をキリスト教信仰と両立させ、自由主義神学は教養市民層の世俗化に追随するのみで、この階層の非キリスト教化の流れをおしとどめるに無力であり、教養市民層のキリスト教からの離反を進行させることになる。

その結果、同じプロテスタントであるイギリスの宗教と比較するとイギリスとドイツは対照的な現象をかもし出している。イギリスの場合には、非国教主義の間には生き生きとした宗教文化が形成され、とくにメソディズムに代表される福音主義的非国教主義はイギリス労働者運動に密接にからまり合った。また国教会と労働者運動との密接な関係も、キリスト教社会主義が国教会系の団体の結成となったことにもあらわれている。

こうしたイギリスの宗教と労働者運動との関係とは全く逆に、ドイツの労働者運動は宗教と断絶して展開され、社会民主党に代

表されるドイツ労働者運動は、この国のプロテスタント主義が民衆運動として不活発であつたことと照応して、ほとんど宗教と交叉することなく成育をとげた。したがつて両国の宗教的状況の根本的な相違として、イギリスのメソヂズム運動のように農民から都市に出てきた労働者がみづからの自意識を表現するために容易に加入でき、場合によってはその中で平信徒説教師として頭角をあらわすことができるような宗教と社会運動の交叉は、ドイツのプロテスタント主義には見られなかつた。そのことがドイツのプロテスタント大衆が精神的空白状態になり、さらに社会民主党を頂点とした社会主義運動を宗教の代替物の性格をもたせたのである。著者が社会主義運動こそプロテスタント主義とカトリシズムにつぐ「第三の宗教」と規定するのでもそうした解釈から来ている。

さらに本書にとつて重要なテーゼになるのは、このプロテスタント的教養市民層が齎らした宗教の空洞化は、左翼の社会主義運動を醸成させるとともに、右翼の民族主義的運動を育成させたというところである。これこそ何故カントとゲーテの国にヒトラーが生れたかという因果関係を解く鍵になつてゐる。いうまでもなくヒトラーは十九世紀後半に起つたフェルキッシュな運動の中からナチズムを興隆させたからである。著者はこのフェルキッシュ運動とナチ運動との関係を第一章「ヒトラーの教養市民層批判」で論じてゐる。フェルキッシュ運動のいわゆる「フェルキッシュ」という言葉はいうまでもなく民族を意味するフォルク (Volk) という語から派生したものであり、一八七〇年頃から用いられるようになる。それはなりよりも人種論的な、とくに反ユダヤ主義的な傾向を強く帯びた排他的で不寛容な民族主義の立場をもつてゐる。それは「民族共同体」という語にもっともよく集約され、もろもろの集団や階級に分裂した近代の多元的、自由主義的社会に代えて、民族概念を核に社会的にも政治的にも統合力をつよ共同体の樹立をめざすものだつた。このフェルキッシュ思想は、roman主義を基盤のうゑに十九世紀のヨーロッパで進行しつつあつた都市化、工業化、個人主義化に敵対し、近代主義に代わる別の、中世回帰的な選択肢を提供しようとするものだつた。フェルキッシュ思想の先駆者としてヴィルヘルム・ハインリヒ・リールがいるが、この思想をより体系的で、より影響力の大きいものに仕上げた人物としては世紀末に活躍した二人の著作家、パウエル・ドゥ・ラガルドとユリウス・ラングベーンがあげられる。これらによつてフェルキッシュ思想が宗教的次元にまで高められ、正統的キリスト教に代る「ドイツ信仰」あるいは「ドイツ的宗教」として立ちあらわれる。さらに一八九九年にはヒューストン・ステューアート・チェンバレンの著作が広汎な読者を獲得する中で、ルートヴィヒ・グルリットらの教育改革運動、世紀末に起つたワンダーフォーゲルの青年運動、シュテファン・ゲオルゲやハンス・ブリュニアによつて理論づけられたいわゆるブントの運動、菜食主義者をはじめとした自然への回帰をめざすコロニーの運動、エ

ルンスト・ハッセやハインリヒ・クラースの強力な指導の下にショーヴィニズムを鼓吹した汎ドイツ同盟、大学教授や学生たちの間にひろがったドイツ学生連盟／キフホイザー連盟などさまざまな民族主義的運動が叢生した。これらのフェルキッシュな思想こそ教養理念の崩壊のあとの精神的拠りどころとしての教養市民層の宗教（代替宗教）となる。

ところが、ナチズムの運動というのは、このようなフェルキッシュ運動の中の一つとして生れたものである。それらの中で一九二〇年代ナチスに近かった結社であるドイツ社会主義党やドイツ・フェルキッシュ自由党との関連で注目されるフェルキッシュな理念を鼓吹していた代表的人物として、テオドル・フィリッテ、アルトウァ・ディンター、ディートリヒ・エックルトの三人があげられる。彼らは徹底したフェルキッシュ的三元主義によって世界をとらえ、一方の極にユダヤ人をおき、他方の極にユダヤ人以外の全人類、とりわけドイツ民族をおき、両者の間の死活的闘争を不可避とみる世界観であった。ナチ運動の出発点は、大戦中にミュンヘンで国有鉄道工場の機械工アントン・ドゥレクスラーがはじめた運動であった。彼がトゥーレ協会のカール・ハラールと知り合い、一九一九年一月に新しい政党の誕生を見るが、これがナチ党の前身であるドイツ労働者党の出現である。その後ナチス党はフェルキッシュの近親的グループと組織として結合したり、排斥したりして膨張していく。

この過程の中で注目すべきことは、ヒトラーが中心になったナチス党は、他の反ユダヤ主義との合同によって拡大するのでなく、むしろ他のフェルキッシュ結社に対してナチス党の独自性を主張して、それらの勢力から距離をとり、その勢力を圧倒した。ナチスを選ぶかドイツ・フェルキッシュを選ぶかの選択をきびしくせまった。ヒトラーの「わが闘争」によってそのことが確認される。こうしてヒトラーのナチス党と他のフェルキッシュ運動の異質ないし対立がヒトラーの個人的戦略によって行なわれたが、本書が注目すべき点として取上げたのは、「わが闘争」の分析によって、ヒトラーは実は教養市民層を批判したということだ。教養市民層とはアカデミズムや人文主義的ギムナジウムの卒業者を指すが、これは帝政期のドイツの指導者であって教養市民層の伝統の保持者であった。ヒトラーは帝政期のエリートに代って下層の出身者のリクルートを考えていた。この教養市民層への批判は、ナチス以外の反ユダヤ主義的フェルキッシュ運動への排斥と重なっていた。それはこれらの運動の指導部が、貴族、大学教授、大ブルジョアジー、それにせいぜい上級中間層の指導者によって構成されることが多かったからである。

こうしてヒトラーは、将来のナチス国家をフェルキッシュ国家と呼びながら、他のフェルキッシュの結社に対して排撃したのである。そこに「わが闘争」の中に述べられるナチ運動に関する彼の理論は、ドイツ社会の中の教養市民層が優越するプロテスタントに対して効果的であり、逆にカトリシズムと社会主義の両世界に対して大して効果をあげえなかつたと著者は考える。

かくてヒトラーの宗教戦略は、プロテスタントイイズムとカトリシズムの既成宗教とは別の、第三の、ユダヤ的要素を払拂した「積極的キリスト教」を追求しようとする。すぐれてフェルキッシュの立場である。ところがかなり早い時期、すなわち一九二〇年頃にはフェルキッシュ的な独自の宗教を追求することによって既成の教会宗教を敵にまわし、ドイツ民族の間に宗教的分裂を持ち込むことを警戒し、宗教問題を政治的次元から解決しようとする。そのため初期の政治運動と宗教運動との区別の曖昧さを止め、ナチスが「ドイツ宗教」の方向に過度にのめり込んで宗教的セクトの性格をおびることによって、既成の教会と対立することを回避しようとする。かくてナチスの初期の母胎であったドイツ・フェルキュ攻守同盟やトゥール協会などのフェルキッシュ系政治団体の没落をはやめることになる。

かくて、確かにナチスは、キリスト教の歴史における終末論的、千年至福説的伝統を、世俗化された形であれ継承していた。しかしヒトラーは宗教戦略としてカトリック教会組織に高い評価を興え、プロテスタントには敵しい評価を下している。それは教養市民層への彼の批判とふかく絡んでいた。こうしてナチスが千年王国論的宗教的要素を抑えて、政治運動も優位させた背景には、ナチス結成以来の宗教路線を選ぶか、政治運動優先の路線を選ぶかの選択が党の体質決定に重大であったという内部事情がある。ルーデンドルフ將軍流の宗教路線やアルトゥア・ディンターのフェルキッシュ的宗教運動とヒトラーは対決し排斥しながら、彼の地位を不動のものにしたのである。またハウアやレーヴェントロウらを中心とした「ドイツ信仰運動」をも退けた。ドイツ信仰運動の「教授宗教」としての性格を嫌悪したからである。

このようにヒトラーがフェルキッシュ運動から脱出して彼の求めるフェルキッシュ国家はフェルキッシュ一般とは異質なものであったという分析は、従来のナチス研究に見られなかったものだけに読者に新鮮な感じを興えている。ナチスの運動がフェルキッシュ運動とは同質のように考えてきた見解を見直し、ナチスの構造解明をより深化させたといつてよいだろう。

以上が本書のあらすじを纏めたものだが、考えて見ると、わが国のナチス研究は、戦後、歴史社会学的アプローチが盛んになり、中産階級の親ナチスの傾向をとらえた「中間層」理論、イギリスをはじめとする西欧諸国との対比で後進国の近代化としてのナチズム研究など、主として政治、経済を中心とした社会科学的方法を全面にうち出して選挙分析など実証主義的試みがなされてきた。しかし本書は最近の社会史の提出した諸テーゼにはむしろ懐疑的であり、人間の心の救済、生き甲斐といった宗教社会学方法を介在させることでナチス研究を活性化させようと狙っている。序章「ナチズムへの宗教社会学的アプローチ」を始め、本書の

至るところにマックス・ヴェーバーの宗教社会学の成果を適用しているのもそのあらわれである。その点で意欲的であり、斬新な方法でいえるだろう。こういう方法論には精緻な実証主義的測定値を要求することはできないだろう。それを承知の上で若干の本書に望蜀の感を述べるとすれば次のことになろう。

著者は、教養市民層とプロテスタントとフェルキッシュ運動の担い手との重なりを前提としている。そうでなければ何故ゲーテとカントの国にヒトラーが生れたかというテーゼは論理的に成り立たないだろう。勿論著者は教養市民層の中の「プロテスタントの優越的地位」というように全くの等式化をしているわけではない。だが叙述の中に著者の考え方は、当然教養市民層ないし教養市民層のエリートはプロテスタント系を前提としている。カトリックに関しては教養市民層は無縁なものとして取扱われている。対照性ははっきりだされているだけに説得力がある。著者が意図するところをもう少し押しつけてみよう。

教養市民層のエリートはプロテスタントの神学者シュライエルマッハからハルナックに至るまで自由主義、啓蒙、合理主義をキリスト教解釈にとり入れることによって、近代主義、技術主義とキリスト教との共存性を可能にし、その結果脱宗教化を齎らすことになった。そのため宗教そのものも信仰の力を喪失してしまい、救済宗教としての使命を果すことができなくなった。このことがドイツ教養市民層のエリートと蒙昧な大衆との分離の現象と同じように、大衆レベルでのプロテスタントは、人生の意味、生き甲斐を興える信仰運動を起さず、そうした精神的空白状態がナチズムを招来したということになる。ここでは高度な知的教養エリートが存立しながら大衆レベルでの文化的貧困に苦しんでいるドイツの文化社会のあり方と、プロテスタント・エリートの自由主義神学と底辺の民衆の信仰的空白という矛盾とが照応し合っている。それに対してカトリック世界ではそれと対照的に信仰が民衆レベルで生きていた。こういうように考えていくと、教養市民層とプロテスタントとが等式化されていることに気付こう。

著者は「教養市民層の中のプロテスタントの優越的地位」という表現で一体性を避けているが、叙述はプロテスタントとカトリックをはっきり対照的に取り扱うかぎり、プロテスタントと教養市民層が重なっている。これ自体は大筋では間違いないだろう、と私も思う。しかし教養市民層はドイツの知識人の社会のとらえ方であり、宗派を超えたものになっている。教養市民層の中にキリスト教に対して信仰の喪失を宣言した自由思想家がプロテスタントとカトリックでは具体的にどういう比率になっているのか。これらの具体的連関の事実関係が本書では抜け落ちている。歴史家の想像力に負って結論を急いでいるように思える。

同じことはフェルキッシュ運動についてもいえる。プロテスタント聖職者、教養市民層エリートの指導するドイツでは精神的空白が生じ、そのために宗教に代って政治のメカニズムが働き、マルクス主義的社会労働運動とともにフェルキッシュ運動が代替宗

教の役割を果たした。フェルキッシュ運動こそ、プロテスタントの教会宗教の形骸化した世俗的な教養信仰にとって代る擬似宗教である。しかしこのフェルキッシュ運動こそナチスの運動の母胎となっている。そうなるとプロテスタント、教養市民層、フェルキッシュとは三位一体となってナチス誕生の原動力となっていることになる。ところが、これらの関連は、代替宗教、擬似宗教、代替教養を媒介にして関係し合っている。さらにフェルキッシュ運動自体をヒトラーが政治戦略から忌避している。この環状の連鎖でつないでいくと、プロテスタント、教養市民の原型とヒトラーとは対極的にほど遠いところにある。むしろ初期ナチス体制に桂冠教授になったのはカール・シュミットであり、マルティン・ハイデガーであり、またナチスの招聘を拒否して亡命したステファン・ゲオルグである。いづれもカトリック的人間である。そのことは本書のテーゼと矛盾することではないが説明を要する所だ。

単的にいうなれば、従来のナチス研究はナチスの誕生の原因を、反近代主義、反技術主義、反合理主義に求めていたのに、著者は逆に近代主義、技術主義、合理主義の潮流がヒトラー体制を生み出したと分析した。しかもこうした逆の局面を照射したのは、従来の社会史の方法とは違って、人間の心の救済、救済宗教が生きているか、衰弱しているかという宗教心理のあり方に迫っているからだ。それだけに意表をつくアプローチを採用し、ナチス誕生の原因に迫っている。

そのために著者はウェーバーの宗教社会学の手法を導入している。その場合、合理化のすんだ社会の中で救済宗教に代って、学問も芸術も性愛も擬似宗教的性格をおびて新しい代替宗教になった状況に対して、ウェーバーは救済宗教をこれらも擬似宗教への批判の規準とした、と著者はいわれる。しかし著者のように、生き甲斐、救済宗教を基準としてプロテスタントとカトリックと比較して、理神論化、自然科学、社会科学との両立可能性に向けたプロテスタントに厳しく、信仰の絶え間ない覚醒によって宗教本来のものの喪失をふせいできたカトリックに高い評価を興えるというスタンスは、ユングの分析心理学に通ずるものであり、著者が宗教社会学方法のモデルとして依拠しているウェーバーのそれではないだろう。

さらにもう一つ。フェルキッシュ運動とヒトラーとの確執について、ナチスの権力構造の矛盾を指摘したことは本書の大きい功績だが、ここでもヒトラーをフェルキッシュ的宗教運動から分離することによって、ヒトラーの宗教に対する政治的戦略の優位が強調されている。これはヒトラーがヨーロッパ精神史の中にうづまいていたオカルト的なものとの無縁性をはっきり出している。戦後トウレ協会をはじめとするオカルト集団とヒトラーとの関係が取上げる研究が叢生している。著者はこれに対して光の側に立つヒトラー像を明確にすることによって、これを拒否している。私も基本的にはそれを承認したいのだが、ヒトラーが年代に応じてどう変身、回心していくのかを考察の射程に入れておかないとあまりにも合理主義者ヒトラー像に偏るのではないかと思え



る。

いづれにしても、本書はわが国のナチス研究にとつて従来見られなかつた独創的な発想でもつて、最近の学界でも注目された作品となつてゐる。それは西ドイツで大勢を占めてゐる政治経済中心の社会史と違つて、宗教感情という社会学的方法では困難な問題を歴史学の中に持ち込んだからだ。そのためにウェーバーの宗教社会学の方法を使ってイギリスとの比較を行つて効果をあげてゐる。また従来ナチスが社会革命であつたという社会エリート論も結構、カトリック世界の人材の登用、交替とプロテスタントの教養人と非教養とのかい離と絡み合つて、本書の中心テーマを補完する役割を与えられてゐる。

長年ナチス研究に精魂をこめられてきた著者がこれだけ広範囲に汎る素材を駆使しながら叙述の一貫性がみられるのは、著者の人生観、学問観、宗教観を通じた現代社会評論が織込まれてゐるからだろう。こういう書物がわが国で出現したことをよるこびたい。

(名古屋大学出版会 A5版四五〇頁 四千元)